

広島女学校における子ども本位の活動に根ざした保育の確立 —アメリカ人教育宣教師M・M・クックと進歩的な保育の導入—

Establishing kindergarten method rooted in the natural activities of children at Hiroshima Girls' School: U.S. Educator-Missionary M. M. Cook and the adoption of progressive method

橋川 喜美代*

HASHIKAWA Kimiyo

本研究は、アメリカ人教育宣教師、M・M・クックが広島女学校において進めた進歩的な保育への改革について分析することに目的がある。分析の結果、次の4点が明らかとなった。①恩物・作業は、子どもの経験を深め発展させる手段という観点から問い直され、新たな材料が自由製作に導入された。②一つの主題を中心に系統立てられた中心的統合主義な保育内容は、子どもの心身の発達という観点から精選された。③恩物・作業で教える場であった幼稚園は、子どもの経験を深める生活の場へと移行した。④クックらアメリカ人教育宣教師らによる改革は当時のわが国の幼稚園を10年余りリードした内容であった。

The objective of this research is to analyze progressive reforms made to kindergarten by U.S. educator-missionary M. M. Cook at Hiroshima Girls' School. The analysis clarified the following four points:

1) New materials were introduced to the idea of free construction, following a revision of "the gifts" of kindergarten from the perspective of deepening and developing children's experience; 2) Concentration Curriculum based in a single-subject lineage was chosen as a means of helping children develop both physically and mentally; 3) the kindergarten, which was a place where children received various "gifts" and were taught by way of different kinds of works, was transformed into an environment where they could deepen their experience of day-to-day life skills, and 4) the reforms implemented by Cook and other American educator-missionaries were some ten-plus years ahead of other Japanese kindergartens of the time.

キーワード：M・M・クック、広島女学校、アメリカ人教育宣教師、進歩的な保育

Key words：M. M. Cook, Hiroshima Girls' School, U. S. educator-missionary, progressive method

はじめに

広島女学校（現、聖和大学）附属幼稚園は、アメリカ人教育宣教師たちがいち早く進歩的な保育を導入した。進歩的な保育とキリスト教伝道は、大阪に移転された1919年から41年までのランバス女学院時代に結実を迎える。1887（明治20）年、私立広島英和女学校は、砂本貞吉が広島に開いた私塾を併合して設立され、アメリカ人教育宣教師ゲーンズ（Gaines, N. B.）を初代校長として招聘した。1891（明治24）年9月に、幼稚園を併設したがキリスト教への反対から園児が集まらぬうちに、台風で園舎が崩壊したため、開園は翌年9月まで延期された。1895（明治28）年4月、広島英和女学校（翌年、広島女学校に改称）は、修業年限2カ年の保姆養成科（1908年に保姆師範科と改称）を発足させた¹⁾。ゲーンズは中心統合の提唱者、クック群師範学校のパーカー（Parker, F.）と交流があり、彼からの著書や学校の刊行物が届け

られていた²⁾。また、ルイスヴィル無償幼稚園協会の長から、後にコロンビア大学ティーチャーズカレッジに奉職するヒル（Hill, P. S.）との交流は深く、その友情の証が1901（明治34）年、マコーレー（Macoulay, F. C.）の日本派遣となった³⁾。ヒルの元で指導を受けたマコーレーはゲーンズを助け、附属幼稚園に進歩的な保育の息吹をもたらしていく。

こうした新しい保育法を受け継いだのが1904年、広島女学校に着任したクック（Cook, M. M.）である。金子は保姆養成科学生、松下トクの『保育案ノート』を分析し、①中心統合主義的影響を受け、連続性・系統化されていたこと、②子どもの興味関心・発達段階に歩み寄る姿勢の一端が見られること、の2点を挙げ、クックによる恩物中心主義改革への端緒を明らかにしている⁴⁾。クックは1911（明治44）年の休暇帰国に際し、コロンビア大学において新教育をデューイから学び、従来の保育時間

*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻幼年教育コース

平成27年6月26日受理

割を廃止し、自由作業を目指し始める。これを支えたのが、1912年に来任したフルトン (Fulton, J.) である。フルトンはコロンビア大学卒業後、アドラー (Adler, F.) がニューヨークに設立した倫理文化協会⁵⁾の師範科を卒業、同校で長い保育経験を積んでいた。田中はクックが進めた改革を進歩主義のキーワードである子どもの「興味」を用いて分析し、フレーベル主義と進歩主義の統合を図り、独自の子ども中心主義を模索するものであったと指摘している⁶⁾。

1919 (大正8)年11月、広島女学校保姆師範科は神戸のランバス記念伝道女学校との合併が決議され、神学部と保姆専修科とをもつランバス女学院として、広島を離れ、大阪での新たな出発を目指した。1928 (昭和3)年、クックは進歩主義教育に基づいた保育への転換を決意するが、この自由な保育の礎を築いたのは1923 (大正12)年に来日し、翌年からランバス女学院の教師となっていたピービー (Peavy, A.) である。ピービーに指導を受けた主任保姆立花富の回想によれば、「教師が立てた計画で子どもを引っ張る」保育から、「子どもが中心で、教師はよく子どもを観察して子どもの求めるものから教育する」というやり方への転換が進められたのである。しかし、立花は、教師主導から子ども中心への保育への転換が、親たちの理解を得るには困難を要したと述懐している⁷⁾。子ども本位の活動に根ざした保育を模索し続けたランバス女学院附属幼稚園は1931 (昭和6)年4月に、ナースリー・スクールを開設し、3歳児保育を開始する。当初、女学院近くの西洋館を買収して園舎を設ける予定であったが、不便だという理由で附属幼稚園の一室を保育室として開園された。ナースリー・スクールの導入は幼稚園が自由遊びを基底としたキリスト教保育を確立するきっかけとなった⁸⁾。初代園長にはピービーが就任し、ナースリー・スクールは、ランバス女学院が1941 (昭和16)年、西宮の現在地に移動するまで続いた。

クックらが目指した子ども本位の活動に根ざした保育は、第1期：恩物中心主義からの脱却 (1904年～1910年)、第2期：フルトンによる自由作業導入 (1912年～1928年)、第3期：ピービーによる自由遊びを基底とした保育の確立 (1928年～1941年)、という3期を通して段階的に進められていく。

本研究では、第1期と第2期の前半である1900年から19年まで、つまり広島女学校においてクックらが進めた改革の動向を、松下トクの『保育案ノート』と本園の保育内容が記載された「保育綱目」から明らかにすることを目的とする。それは、恩物による教授の場であった幼稚園が経験を深める生活の場へと移行する過程を辿ることでもある。

1. 恩物中心主義からの脱却

わが国の明治以来の教育にキリスト教が果たした役割は大きい。ここでは、広島女学校附属幼稚園の実践を明らかにする前に、アメリカ人教育宣教師たちがわが国の幼児教育に与えた影響とともに、アメリカの幼稚園運動についてまず見ておきたい。

(1) アメリカ人教育宣教師の活躍

松平は、キリスト教が幼児教育に与えた影響について、イエス・キリストが「神に近づくには幼子のことであることが必要である」として、幼児の存在を重視したこと、フレーベルの教育観、人間観がキリスト教のそれに基づいていること、優れた保育者がキリスト教宣教師やキリスト者のなかから生まれたことなどを挙げている。松平はその優れたキリスト教宣教師の中でも、ハウ (Howe, A. L.) の功績を次のように称えている⁹⁾。

「彼女は、神戸の教会の婦人会のメンバーが、幼児教育施設を開設するにあたって保育者を探しているとの講演を聞き、ただちにその求めに応じ、母国アメリカを離れて来日した。1887 (明治20)年のことである。ハウは、シカゴの幼稚園での約10年間の保育者としての経歴をもっていたが、その経験と知識とを日本で役立てることを願ったのである。彼女は、1889年に頌栄幼稚園を設立し実際の保育に当たるとともに、頌栄保姆養成所を設立し保育者養成にも力を注いだ。この養成所では、官立の東京女子師範学校の保姆練習科に比べて修業年限、週時間数の面で合計約3倍の時間を設けていた。ハウが、いかに質の高い保育者の育成を考えていたかをうかがうことができる。また、フレーベルの思想や方法の表面的な理解や導入にとどまっていた当時の日本の状況のもとで、ハウがその精神や原理を保育の中に生かし、また『人之教育』『母の遊戯及育児歌』などの翻訳をとおしてフレーベルの哲学・思想を本格的に紹介した功績も見逃すことはできない。さらに、彼女は保育者の団体を組織することを提唱し、そのことをとおしても幼稚園の振興発展に寄与した。保育の仕事にとって、保育者個人々の努力や工夫は、もっとも基本になる条件であるが、と同時に、フォーマル、インフォーマルな団体や組織、仲間たちと協力し合い、学び合ってゆくことは、実践の質を向上させてゆくために不可欠な条件である。ハウは1927年 (昭和2)年にアメリカに帰国するまでの40年間を日本の幼稚園教育のために文字通り献身したのである。」

また、マコーレーは1906年に出版した自伝『勲章の貴婦人』(The Lady of the Decoration)によって、彼女が導入したスキップとともに、広島女学校の名前をいち早くアメリカに広めた。マコーレーは赴任早々、保姆養成科の学生にスキップを導入した様子を次の様に語っている¹⁰⁾。

「レッシング先生は私に、幼稚園保姆養成科の年長クラスに、体育の授業を始めてくれるようにとおっしゃいました。そこで私は、最初のレッスンとして『スキップ』を教えることに決めました。スキップは、日本ではまだ知られていない実技のようですが、これがないと、幼稚園教育は成立しないと思うのです。そんなわけで、私は、担当する十四名の生徒を外のポーチに連れだして、身ぶり手ぶりで私のやる通りにやっごらんと指示しました。」

この取り組みはマコーレーが散歩に出かけた際、通りすがりの年配の女性が一生懸命スキップを踏んでいるのを見かけるほど周辺の人々にも影響を与えた。そうした結果に気をよくした彼女は、あらゆる種類のスキップやフィギュア・ダンスを生徒達に教えたのである。

ところで、アメリカのフレーベル主義に基づく保育を根底から問い直したのは、ケンタッキー州ルイスヴィルの幼稚園教師ブライアン（Bryan, A. E.）と弟子ヒルである。マコーレーはこのルイスヴィル無償幼稚園協会の養成コースを修了していた。ブライアンが1890年の「全米教育協会」（National Education Association）で行った「恩物作業は子どもに仕えるものではなく、支配するものになってしまった」という歴史的演説に始まる恩物批判が、幼稚園界の恩物崇拜を突き崩すきっかけになった¹¹⁾。

マコーレーによる保育は、和服を着た園児や保姆を始め、養成科の学生にまで動きやすいように、両肩にフリルのついた白いエプロンを着用させることから出発した。遊戯の中にリズムを取り入れ、ピアノに合わせたスキップ指導は、難解で歌にくい曲を改良し、楽しく歌えるような工夫へと発展する。お辞儀をしながら歌い、スキップする「お早う先生」は、恩物としつけにとらわれていた従来の保育法に新しい息吹を吹き込むには十分であった¹²⁾。

この進歩的な保育は1904年に広島女学校に着任したクックによって受け継がれていく。1937年、クックはフレーベル幼稚園百年祭における講演を終え、翌年68歳で定年を迎えて帰国した。広島女学校でのクックの功績は金子によって解明されてきた。しかし、その集大成ともいべきナースリー・スクール開設に至るランバス女学院での改革には踏み込んでいない。

(2) アメリカにおけるフレーベル主義幼稚園の理論と実際

アメリカ幼稚園教育は1855年に始まり、20世紀初頭に黄金時代を迎える。その象徴が、1903年から始まる国際幼稚園連盟の19人委員会であり、フレーベル主義幼稚園を代表するブロー（Blow, S. E.）と進歩主義幼稚園を代表するヒルの論争が繰り広げられたことは、すでに多くの研究者によって明らかにされてきた¹³⁾。両派の論争は、共にフレーベル主義に基づきながらも、その解釈が

次の3点において大きく異なっていた。まず第1に、教育の出発点たる子どもの生来的な衝動に対する解釈である。第2に、子どもの思考力を組織する手段である。そして第3に、象徴主義に対する解釈である。

ブローは、恩物の組織的体系を強調し、恩物に対する教師の認識を高めることによって、改革を目指したのに対し、ヒルら進歩派は恩物を子どもの生来的衝動・本能との関連から研究し、子どもが家庭生活において目にする諸活動を再現する手段として取捨選択する。ブローは1908年に出版した『幼稚園における教育的問題』（*Educational Issues in the Kindergarten*）において、フレーベル主義幼稚園を脅かす新しい潮流として紹介しているのが、ヘルバルト派による中心統合主義プログラムと自由遊戯主義プログラムである。

中心統合主義幼稚園の特色は、すべての課題がある特定のテーマに結び付いている点にある。選択されたテーマを基に、恩物・作業・ゲームが利用される。例えば、リンカーンの生涯と人格というテーマが選ばれたなら、その成長に合わせて、生まれた家・貧しさを象徴するような木の葉のベット・平底舟が恩物を用いて製作され、彼が働く暖炉は、カードにシャベルを形どって貼る作業として行われる。さらに、学校時代の様子や優しい祖母、自信を持って生きる祖父、そして困難な仕事に対するリンカーンの誠実さが語られる¹⁴⁾。

こうしたやり方に対し、ブローはリンカーンの生涯をドラマ化したところで、そうしたものを正確に把握できるものではないと批判した。子どもが想像できるのは、彼らの経験に根ざしたもののみであり、そうしたものの以外の知識は教育的価値があるかどうかにかかわらず、教師からの詰め込みの強要になる。それゆえ、リンカーンの誠実さを見習わせることにはならないと考える¹⁵⁾。

子どもの想像力から、蝶・鳥・農夫・大工といったテーマを想像できるのは、経験に基づいたもののみだ、というブローの指摘は正しい。子どもの教育は、その衝動と活動から出発すべきであり、組織だった外的知識体系ではないという指摘は注目に値する。なぜなら、先に述べた国際幼稚園連盟での論争は、フレーベル主義幼稚園が恩物・作業という外的に組織立てられた体系で、子どもの生来的な衝動や活動を損ねている、という指摘に基づいて行われたからである。こうした一見矛盾するような問題点については、次の自由遊戯主義プログラムに対するブローの批判から明らかになってくる。

自由遊戯主義プログラムでは、恩物・作業以外に多くの材料を子どもたちに与えることによって、自発的な子どもの活動を促すことが、改革の目的であった。そのため、フレーベル主義幼稚園では見られなかった人形・皿・箒・塵取り・洗濯板などを与え模倣遊びが取り上げられるとともに、シーソー・ブランコ・登ったり、ジャンプ

したりする設備・ボールによる競技が重視された。恩物による手先の活動よりも、身体全体を使った活動による各器官の発達が求められたのである。こうした傾向は、ブローが自由遊戯主義プログラムの一例として挙げたパーク (Burk, F.) らによるカリフォルニア州サンタバーバラの保育に見られる¹⁶⁾。

ブローは、サンタバーバラの保育活動のすべてが、現時点での子どもの衝動・興味の遂行にすぎず、より高次の表現へと導いていない点を批判している¹⁷⁾。その一例が6色のビーズを通す活動である。ブローはこれを色の概念を習得していない幼い子以外には、あまりにも単純で力を要しない課題だと見なす¹⁸⁾。しかも、ブローは恩物や組織だったゲーム以外の伝統的な遊具が加えられたことは「教育的進歩ではなく、後退である」と異論を唱える¹⁹⁾。これは先ほどのブローの考えと矛盾する。この点をもう少し説明しておこう。

ブローによれば、恩物はフレーベルが伝統的な遊具の中から、最も教育的に価値あるものを選び出し、組織化したものに他ならない。恩物に含まれる論理的統一は、教師がフレーベルの発生的発達法に基づき、子どもに恩物を意識的に利用させ、興味を惹起することができれば、子どもの自発性を損なうことなく、しかも高次の理想へと近づけることができる、と捉えていた。こうしたブローの恩物を絶対視する考えが、未熟な教師たちを機械的な恩物教授へと追いやる原因となったことはいうまでもない。

2. 中心統合主義保育への試み

金子は、広島女学校附属幼稚園の保育実践を分析する資料として、松下トクの『保育案ノート』以外に、クックの「ノート」、宮崎カメの『保育案ノート』に基づいて考察を試みている。それによると、クックのノートでは、フレーベル主義的な要素と統合主義的構成方法の混合が見られるが、宮崎の保育案では、主題に沿って遊戯・唱歌・談話・手技を行う中心統合主義的な技法が全17週に渡って用いられていたという。しかし、宮崎の保育案はわずか17週と期間が短い。そこで、1906年4月16日から1908年3月20日に至る、松下トクの『保育案ノート』の年間計画から附属幼稚園における実践を分析しておくこととする²⁰⁾。

(1) 春・夏の指導計画と指導法の改良

松下 (以下、トク) の保姆養成科入学はマコーレー帰国後であった。当時、養成科の生徒らはアシスタントとして、卒業生の保姆たちを補佐し、その経験を踏まえて保育案を作成していた²¹⁾。

1906年4月時点では、「冬の計画の続きにおいて」と断り書きがなされている。しかも、2年間分のノートで

見ていると、1年目と2年目の内容に違いが見られ、その違いにトク自身の子ども理解の成長が偲ばれる。特に、2年目の4月には新入園児が幼稚園の生活に慣れ、集団活動がだんだん増えてくるよう配慮しようとする点からも、恩物による一斉画一的な指導形態ではあったが、子どもの育ちへの確かな視点が見いだせる。

表1 春の指導計画

【月および週の主題】

- 4月 すべての生命の相互依存
 第1週 自然の春への準備
 第2週 鳥の春への準備 (渡り鳥が戻ってくる、親鳥が巣を作り卵を産む、親鳥が雛を育てる、親鳥が雛に飛び方を教える)
 第3週 花の春への準備 (木々がよい時期に芽生える、蕾がよい時期に目覚める、花がよい時期に開く、木々の葉が茂り木陰ができる)
 5月 すべての生命の相互依存
 第1週 野菜の春への準備 (種からできる野菜、球根からできる野菜、店に並ぶ旬の野菜、家庭で料理される旬の野菜)
 第2週 穀物の春への準備 (稲の苗植え、苗床の話、トウモロコシの開花、家庭の料理の具材や動物の肥料となる穀類)
 第3週 家庭の変化 (母親による家の掃除、蚊帳の利用、衣服の洗濯、衣替え)
 第4週 家の変化 (厚手から薄手の服へ、日傘の準備、帽子の準備、団扇の準備)

4月は前年度の冬の計画を受け継ぎながら、自然の法則と全体的統一が目指される。保育カリキュラム全体は聖書の教えに則り、子どもたちが自然の普遍的法則に従うのに失敗しないように、復活された生命の召命に応じて目覚める自然界の様子を子どもたちの眼前に示していく。4月16日から5月31日までの春季計画は、第1週から第7週まで

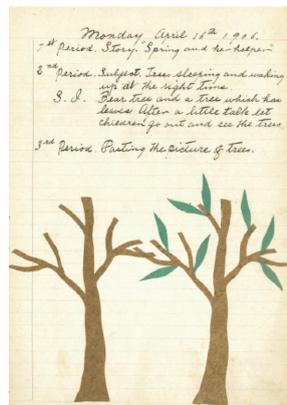


図1

と書かれており、4月と5月は連続して考えられていた。

第1週目の主題は、「自然の春への準備」である。月曜から木曜までの主題は「木の眠りと時にかなった目覚め」「時にかなった葉っぱの目覚め」「時にかなった花の蕾の目覚め」「木陰の効用」と続く。金曜日の主題はなく、自由画、遊具を使ったピクニック遊びなどが計画されていた。

4月16日初日の日案は図1で示したように、1時間目にはお話「春とその助け人」、2時間目の主題「木の眠りと時にかなった目覚め」では、子どもたちを外に連れ出し、少し話をした後、木や葉っぱのついた木を提示し、観察させる。それを踏まえ、3時間目は切り抜いた木を手技帳に貼る活動が展開する。

このように春季の主題が週案、日案において系統性、

連続性をもって具体化されていく。子どもを外に連れ出すなど、自然への関心を持たせる工夫はなされているが、家庭から幼稚園の集団生活に入ったばかりの子ども的心情面を配慮しているとは言いがたい。

続いて作成されたのが6月からの夏季計画である。トクは4月からの中心的真理を踏まえ、自然の法則に従う例題として「太陽」を取り上げている。太陽の熱や光線の効用が自然、生き物、人間との関わりから解き明かされていく。

表2 6・7月の指導計画

【月および週の主題】

- 6月 自然の法則と全体の調和
 第1週 夏の太陽（冬の比較、花が温かさで目覚める、緑の小麦畑が太陽光線で黄色くなる、麦の生長に必要な水）
 第2週 夏の水辺の生き物（魚、水生生物、蛙、亀）
 第3週 夏の草原の生き物（蟻、蜂、蝶、鳥）
 第4週 夏の子どものたちの生活（日中の木陰がもたらす楽しみ、月明かりでの楽しみ）

7月 6月の継続

- 第1週 夏の太陽で活動する鳥たち（雲雀、カナリヤ、ツバメ、雄鶏、鶏とヒヨコ）

生き物がただ科学的知識として教え込まれるのではない。例えば、3週目の草原に生息する生き物として、蟻、蜂などが主題となる。

6月19日(火)の1時間目には、蜂の巣の絵を切り取る。2時間目の主題「夏の草原の生き物：蜂」では、本物の蜂の巣を利用し、紙の蜂を持って遊びに出かける。

3時間目には蜂の巣の絵を描く。このように実物を見せてから製作させるといった実物教授に加え、前日に行った蟻の巣と比較させ、その違いを明確化させることの必要性が実践後に書き込まれるなど、教える方法での工夫を行っている。

1907年の春・夏季の指導計画における4月の目的は、子どもが入園に伴う環境の変化に慣れ、家庭と周りの世界に興味に向くよう助けることであった。なお、1907年1月1日から、「1時間から3時間」という時間割に替わって、「朝の話 (morning talk)・恩物 (gift work)・作業 (occupation work)」という枠組みを用いるようになった。4月1週目、初日の4月15日(月)は週の主題である「春の家庭における活動」に従って、朝の話は春の服装について話す。恩物は、第1恩物を使って色によるゲーム遊び。続く作業は紙に描かれた丸を色づけする。2日

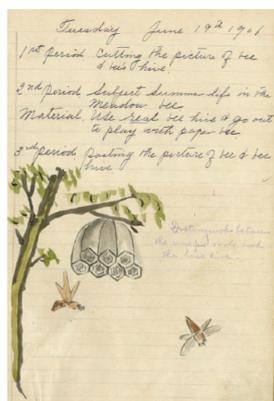


図2

目の16日(火)には、春の食事についての話に続いて、前日同様、第1恩物を使って数遊びがなされ、作業はビーズ通しであった。トクは最初、恩物によって「色を教える」と記していたが、「色を強調した遊び」に変更している。2日目の「数を教える」が、「数を強調した遊び」に書き替えられている。保姆が教えるのではなく、子どもが遊びを通して自ら学ぶことへの移行が進んでいく。さらに、第2週目の25日(木)では、子どもたちは「バスケットを持って野に出かけ、草原で遊ぶ」とあり、春の日差しを浴びて美しく咲く花を摘みながら、季節の変化を味わうのである。昨年(1906年)の自然を観察するため出かける計画とは大きく異なっている。

また、「雑草を野菜に見立てる」(1907年4月23日)、「粘土のケーキと木の葉の紅茶で喫茶店をする」(1907年6月19日)、「雑草を米の苗に見立て田植えや稲刈りをする」(1907年11月25日)というように、いろいろなものが遊びの材料として活用されていた。

(2) 秋・冬の指導計画と恩物・作業の指導法

6月に続き、7月には9月からの秋・冬季の指導計画が作成される。年間の主題は「相互依存と協働」(Interdependence and Cooperation)であり、生命とその関連性が追求される。その聖句は、「天にあなたがたの父がおられる」「神があなたがたを養ってくださる」「みんな兄弟」「互いに助け合いなさい」である。9~11月の秋季主題は、「家族の統一と相互依存」であり、①子どもの家庭、②子どもの暮らし、が保育内容として取り上げられる。12月の主題は「全家族の唯一の父」であり、天におられる父なる神が中心となる。1~3月の冬季主題は「地域社会の相互依存」であり、子どもの社会生活が取り上げられる。

表3 年間の指導計画

【月および週の主題】

- 9月 家族の統一と相互依存：子どもの家庭
 第1週 家庭から幼稚園への復帰
 第2週 家庭（その秩序と整頓、家庭の成員）
 第3週 私たちの幼稚園（その秩序と整頓、幼稚園の成員）
- 10月 家族の統一と相互依存：子どもの暮らし
 第1週 子どもの衣服（母が作った木綿の着物、着物を売る店主、綿工場、農夫等）
 第2週 衣類のつづき（下駄を買う、下駄を売る、木を切り出す樵夫、農夫）
 第3週 子どもの食物（母が米を調理する、店が米を売るために確保する、農家が米俵を作り店に送る、農家が稲を植えて刈り取る）
 第4週 子どもの食物（お茶、野菜、果物、水）
- 11月 家族の統一と相互依存：子どもの暮らし
 第1週 暮らし（石屋、石工、採掘人）
 第2週 建物
 第3週 屋根（藁ぶき）
 第4週 漆喰（泥）

- 12月 全家族の唯一の父
 第1週 花や木の家族
 第2週 鳥や昆虫の家族
 第3週 生き物の冬の生活

- 1月 地域の相互依存
 第1週 休日
 第2週 新年を迎える助け人（清掃するのは誰、お餅を作るのは誰、年賀状を運ぶのは誰、新年の挨拶が交わせるのは誰のおかげ）
 第3週 毎日の助け人（郵便配達人、駅員、水夫、電話交換手）
 第4週 毎日の助け人（警官、消防士、医者、牧師）

- 2月 地域の相互依存
 第1週 日々の救い（鉄道員の視覚、消防士の聴覚、母の味覚、フェリーボートの乗組員の技能）
 第2週 偉人（看護師ナイチンゲール、大統領ジョージ・ワシントンの少年時代等）
 第3週 ある少年の育ち（少年セドリックの成長）

- 3月 地域の相互依存
 第1週 水（雲・雨・雪となった水、春の小川、大海の水、魚の住処としての水、飲み・体や洗濯物を洗う水）
 第2週 風（北風とその働き、東風とその働き、南風とその働き、西風とその働き）
 第3週 太陽、月と星、蠟燭と油、電気

9月の夏休み明けの1週間は、家庭から幼稚園に戻ってきた子どもたちの状態が徐々に整えられる。2週目の主題は「家庭」で、その秩序と整頓が家族との関わりから取り上げられていく。9月17日（月）は1時間目に、掃除の歌を歌った後、2時間目には主題「家庭の秩序と整頓」にそって、紙と棒で寝室か客間、そしてそこに花を飾る花瓶を作る。3時間目にはその部屋を描く。18日（火）の1時間目は、紙でバケツとモップを作る。2時間目には主題「母親の掃除。家庭の秩序ある整頓された部屋」にそって、子どもたちは紙のモップで床を綺麗に掃く。3時間目には床を掃除する絵を切って貼る。翌、水曜には障子の張り替えをする父親が、木曜にはそうした庭仕事で両親を手伝う子どもが主題となる。

表4 指導の観点 子どもの衣服：木綿の着物

誰による	活動	結果
1. 母親	木綿の着物を買ったり、作る	新しい着物を着る 幸せと満足
2. 店主	衣服を売る	
3. 木綿工場	糸や服を生産する	新しい糸や衣服
4. 木綿農夫	畑で綿を栽培する	新しい綿
5. 週全体の復習		

表5 週案

1906年10月1日（月）	
1時間目	裁縫の絵を切りとる。
2時間目	主題：母親が買ったり、作った木綿の着物 材料：第4恩物で作った部屋と母親の紙人形
3時間目	裁縫の絵を糊づけする。
ねらい	母親は子どもたちのために新しい着物を買ったり、作った

	りする。母親や子どもらは素晴らしい着物を持つことによって喜びと幸せが得られる。
1906年10月2日（火）	
1時間目	紙の衣服を作る。
2時間目	主題：店主がセールのために揃えた服 材料：第4恩物で作った店と紙の衣服
3時間目	店の絵を描き、衣服を糊づけする。
ねらい	店が新しい木綿の着物のセールを準備する。そこで私たちは着物を買ひ、女性たちを綺麗にし、寒い日を温かくさせることができる。
1906年10月3日（水）	
1時間目	織物の絵を切る
2時間目	主題：工場で生産される糸や着物 材料：第2恩物を機に見立て、子どもたちに織らせる
3時間目	機で織っている絵を糊づけする。
ねらい	工場の職人が綿を織物や糸にする。私たちは素敵で温かな服を着ることができる。
1906年10月4日（木）	
1時間目	綿の実を作る
2時間目	主題：畑で育った綿 材料：子どもたちを砂場に行かせ、綿を植える。
3時間目	綿の茎と葉の絵を描き、綿の実を糊づけする。
ねらい	農夫は綿がよく育つように畑を耕すので、私たちは優れた綿が確保できる。
1906年10月5日（金）	
1時間目	布、糸、服についての自由な話
2時間目	遊具の日
3時間目	未完成の仕事を片付ける。

10月の1週目の週案を細かく見ておこう。子どもの暮らしに不可欠な衣服が主題となる。指導は、a.活動するのは誰か、どこか、b.どんな活動がなされているか、c.結果はどうか、といった点にある。

- 月曜日－裁縫の絵を切り取り、それを白い紙に糊づけする。第4恩物で部屋を作る。
 火曜日－紙で服を作り、それを白い紙に描いた店に糊づけする。第4恩物で店を作る。
 水曜日－機で織る職人の絵を切り取り、それを糊づけする。第2恩物を機に見立てる。
 木曜日－綿の実を作り、それを白い紙に描かれた茎と葉に糊づけする。

こうした恩物・作業はそれを作らせること自体が目的ではない。それはねらいである自分たちの衣服がどのような過程を経て手に入れられるのか、その過程に展開する相互依存と協働の実態を体験を通して知り、感謝をもって生きる道案内をするための手段であった。それゆえ、必要とあれば、木曜のように砂場に綿を植えるといったことも行われたのである。しかも、主題は子どもにとって身近な生活圏である家庭から、同心円的に店、工場、畑へと拡大していくように並べられていた。こうした点から、ブローが中心統合主義保育に対して批評したように、恩物・作業という外的に組織立てられた体系で、子どもの生来的な衝動や活動を損ねているといった批判は当てはまらない。一斉指導ではあったが、子どもやその

生活との関連性が常に考慮され、恩物・作業への固持・遵守は見られず、主題にそった柔軟な時間・遊具の利用がなされていたといえる。

3. 子ども本位の活動に根ざした保育への模索

1912（明治45）年、クックは休暇帰国していたアメリカからフルトンを伴って帰校した。保姆師範科生徒から附属幼稚園保姆となった佐野小春はここから始まる動きを「未曾有の大改革」と称している²²⁾。従来の時間割を廃止し、自由作業の導入から始まった取組みは、1914（大正3）年の「保育綱目」にまとめあげられていく。

(1) フルトンの保育観と自由製作

まず、佐野の回顧談から、フルトンによって進められた改良について触れておこう²³⁾。

「明治45年の春、クック先生はフルトン先生を同伴帰校されました。

大正を迎えた母校は教育上にも大変化で未曾有の大改革でした。黒リボンで小さい頭をくると巻いて斜め前で蝶結び、日本びいきの先生、さっさと靴をぬいで白足袋草履ばきといういで立ち。市内も身軽く歩かれる姿は随分人目を驚かせたものです。優れた事は一つだに逃がさじと、かぶき劇には実に熱心に行かれて、それこそ幼児劇のドラマに表情に早速応用されるのでした。リズム体操も当時出来初めだとの事でアメリカ土産として野球も教えて遊ばせて下さった。音楽唱歌の時間に、アクビの練習、口笛の稽古にはとって驚かされました。

作詩、作曲、メロディーに対しての調和音の作譜等素晴らしい指導振りで其頃に歌詞改訂、リズム、唱歌の書籍出版までされたものです。画も大胆な指導方法に一転し、手技は小を大に、材料を豊富にして、自由作製にと指導されるので、木片、紙片、古箱、空缶等何でもが作品材料にされる事になりましたので当時手技係であった私は毎度仰天していました。保育時間割を一切廃止して、入門から左様ならまで子供の動きの儘に指導、見守り役の私達は当分はかなりとまどい続けました。」

佐野が言う大改革は1914（大正3）年、クックが日本キリスト教連盟の第8回報告書に掲載した図3に示されている²⁴⁾。子どもたちは、一斉指導から解放され、それぞれが思い思いに製作した船、家、郵便局、銭湯などを使って大掛かりなごっこ遊びを展開している。しかも、その材料はフレーベルの恩物などよりもはるかに大きな積木である。

さらに、第10報告書には、兎や鶏を飼育する子どもたちの写真に加えて、海岸への園外保育の後、グループに分かれ、蛤を料理して、客人にごちそうするごっこ遊びの様子が紹介されている²⁵⁾。

こうしたやり方は自由な保育の礎を築いたピービーの次の考えが参考になる。「子供達には只見たり聞いたり



図3

した丈では何でも其物が真に自分のものとしてしっかり這入りません。ですから行って後自分達の経験した事を

積木やその他の材料で造って見たり、絵をかいったり、劇的遊をしたり一緒にその経験を話合ったりする事が大切です。故に見てきた後は先生が気をつけて、子供の心を刺激する様な材料や話や絵を用意して、此等のものを通して彼等の経験を深め、真の意味がわかる様に」するためであった²⁶⁾。

また、幼児曲集『リズムと歌の遊戯』が1915（大正4）年、フルトンによって編纂出版された。その序には、本書の目的が「本書ハ多年幼稚園児ノ音楽遊戯ニツキテ研究ヲ重ネラレシフルトン女史ノ三年前当幼稚園来ラレ幼児ノ日々ノ遊ヲ観察シ彼等ノ要求ニ応ジ是ニ適當セル楽譜ヲ選バレ卒業生数名ノ歌詞ヲ付ケセシモノニテ特ニ本書ハ楽譜ヲシテ歌詞同様ノ意味ヲ発表ナサシ」むことであつたと記されていた²⁷⁾。季節や行事の歌、基本リズム、ゲーム、簡単な手遊びが1冊にまとめあげられるなど、フルトンによる改革は急ピッチに進んでいく。

そうした中、「保育時間割を一切廃止して、入門から左様ならまで子供の動きの儘に指導、見守り役の」保姆たちがとまどい続けたのは、子どもの動きに込められた思いをいかに指導し、どのように見守るのがすぐには理解できなかつたからだと考えられる。

(2) 「保育綱目」の作成

新しい保育観に基づき出来上がったのが、以下に示す「保育綱目」である²⁸⁾。まず、「保育綱目組織上熟慮ヲ要スル事項」と「保育綱目ノ指示スベキ点」という2点から保育綱目編成の考え方を明らかにしておこう。

この「保育綱目」は、下線で示したように、子どもの遊びが家庭、社会、自然への興味や能力をもとに展開するものととらえる。そして、その遊びを談話、童話、唱歌、音律、郊外遠足による観察といった保育内容をもって、変化・発展させることを通して、心身の発達を目指すものであった。そのために、恩物・作業に加えて、「木片、紙片、古箱、空缶等何でも」が作品の材料となつたのである。ところで、こうした遊びのとらえ方並びに保育内容の精選は、1919（大正8）年12月から1922（大正11）年、文部省の派遣でドイツやアメリカに在学研修

保 育 綱 目

保育綱目組織上熟慮ヲ要スル事項

第一 家庭 社会 自然界ニ存スル幼児ノ興味

第二 幼児身心上ニ於ケル能力

保育綱目ノ指示スベキ点

第一 幼児ノ成長発達ヲ促サンガタメ是等ノ興味ヲ利用スベキ事

第二 心身ノ発達ヲ増長セシメンガ為メニ幼児ニ適當セルモノトシテ精選サレタル談話 童話 唱歌 遊戯 音律ヲ用ヒ及ビ郊外遠足ヲナシテ自然物ノ觀察ヲナサシム

第三 普氏ノ恩物手芸及ビソレニ付属セル材料ヲ用ヒテ幼児ノ工業的 美術的 構成的 創造的 能力ノ進歩ヲ助ク

一年ノ間保育綱目ノ原基

幼児ノ有スル興味

家 庭

社 会

自然界

譬へバ

春 (3月 4月 5月)

家庭ニ於ケル興味

家 族

日々ノ職業

家屋及ビ屋内ノ器具

時候ノ変化ニ伴フ家庭ノ仕事

社会ニ於ケル興味

幼稚園

近 隣 店頭及ビ店頭ノ働人店頭ニ於ケル時候ノ変化ニ伴フ準備

自然界ニ於ケル興味

家 畜

幼稚園ニ飼養スル動物

種 子

鳥

葉花木

保育綱目

幼児ノ日々為ス遊ビハ実ニ多方面ニシテ從ツテ其表ス遊ビハ家庭的 社会的 自然的ナルアリテ此等ノ遊ビハ各時期ニ伴ヒテ変化ヲ生ス此等ノ遊ビヲ通シテ吾等ハ幼児ノ心身発達ヲ促サントス (下線：引用者)

時期ヲ分チテ

春 3月 4月 5月

夏 6月 7月 8月

秋 9月 10月 11月

冬 12月 1月 2月

幼児ノ興味ノ種別

家庭ニ於ケル興味

社 会 幼稚園近隣店舗等

自然界 木ノ葉ノ変化スル事 種子蒔 鳥獸及魚類ノ生活

目 大正3年4月ヨリ全4年3月マデ

4 月

第1週

新入園兒ヲシテ幼稚園及保姆並ニ朋友ニ慣レシム事

春季ニ於ケル幼児ノ經驗

正確ナル時ニ從フ事

第2週

家庭内ニ於ケル春季ノ活動

家族及ビ各自ノ職務

第3週

春季ニ於ケル自然界及ビ社会ノ変化

春季ノ花及種子蒔

春季ノ衛生 大掃除 (家庭内ノ清潔法及自然界ニ存スル清潔)

(以下 略)

に出ていた倉橋惣三の考えに近い。

1925（大正14）年に開催された「全国保育代表者協議会」において作成された幼稚園内容案では、幼稚園教育要項を以下の様に記している²⁹⁾。

幼稚園教育要項及編成について

幼児を教育するには遊びの生活を本体とし幼児に適切なる實際生活、芸術生活、及び運動遊戯を以てし又自然界及社会生活の直観をなさしむ。

（説明）幼児教育要項は従来遊戯、談話、唱歌、手技の四に限定されてあるけれども、これでは幼児の遊びの生活を全体として指導するのには不十分の点がないでもないから常に幼児に適当な實際生活、芸術生活及び運動遊戯等から、自然界に及び社会生活の観察等を以てその内容とする。

而して實際生活とは身のまわりの始末、仕事の手伝、食事の当番、会話などの如きものを意味し、芸術生活には音楽、童話、図画、製作等を包含し、運動遊戯は各種の運動遊戯や、ある種の律動遊戯などであり、これに動、植、鉱物の直観、自然現象の観察などと、社会生活のあらはれたる市街、村落、停留場、市場、店舗などの社会事象や社会の中にあらはれる種々の仕事、事項の類を観察させることを含む。

けれども、これらは分科としての要目ではない。常に具体的な幼稚の生活を指導することを主とする。それゆえ一つの遊びをとって見ると前記各方面の称々の内容を包含してをる。

この「全国保育代表者協議会」は、「今回の会議は近くその制定を熱望して居る幼稚園令の基礎たるべき内容案の攻究を目的とし、臆ては文部当局が同法令の制定に際してはその最も有力なる参考案として否も一歩進めてはその基本となるべき案の作製協議を目的」として開催された³⁰⁾。倉橋は当初未定であった幼稚園教育要項として、「幼児を教育するには遊びの生活を本体とし幼児に適切なる實際生活、芸術生活、及び運動遊戯を以てし又自然界及社会生活の直観をなさしむ」を提出したが、議論が沸騰し、説明が付け加えられることになった³¹⁾。

「保育綱目」は、倉橋らが説明するすべてのものを含んでおり、その考えが当時のわが国の幼稚園をリードするものであったことは明らかである。

おわりに

広島女学校においてクックらが進めた『保育案ノート』から「保育綱目」に至る改革は、次の4点にまとめられる。①恩物・作業は、子どもの経験を深め発展させる手段という観点から問い直され、新たな材料が自由製作に導入され、豊かさを増した。②一つの主題を中心に系統

立てられた中心的統合主義な保育内容は、子どもの心身の発達という観点から精選された。③恩物・作業で教える場であった幼稚園は、子どもの経験を深める生活の場へと移行した。④クックらアメリカ人教育宣教師らによる改革は当時のわが国の幼稚園を10年余りリードした内容であった。

なお、こうした先端的な改革は保護者は言うに及ばず、保育に携わる者の理解を得るにもなお時間を要したのである。それは「全国保育代表者協議会」において作成された幼稚園内容案が「幼稚園令」に反映されず、従来通りの「遊戯、談話、唱歌、手技」に「観察」が加わっただけに終わったことから推察できる。

注

- 1) 聖和保育史刊行委員会『聖和保育史』聖和大学、1985年、54頁には1895年の保姆養成科設置、さらに76頁には1908年の学則改正に伴う保姆養成科は保姆師範科に改称されたことを記している。しかし、この保姆養成機関名はその略則表記によると、1908年までは「広島女学校附属幼稚園師範科」と記し、1909年以降「広島女学校保姆師範科」と変更されている。
- 2) サムエル・M・ヒルバーン著、佐々木翠訳『ゲーンズ先生』広島女学院、2002年、17-18頁。
- 3) 同上書、107頁。
- 4) 金子嘉秀「明治後期の幼稚園における中心統合主義カリキュラムの受容・実践内容に関する研究—広島女学校附属幼稚園師範科生徒の保育案ノートを手がかりとして—」『保育学研究』第51巻第1号、2013年、6-16頁。
- 5) 倫理文化協会はアドラーがニューヨークに設立した幼稚園から中等学校、さらに保姆師範科から成る総合学園である。1878年、アドラーはカリフォルニア州サンフランシスコで、幼稚園の開設を訴える講演を行い、シルバー・ストリート幼稚園が設立される。
- 6) 田中まさ子『幼児教育方法史研究—保育者と子どもの共生的生活に基づく方法論の探求—』風間書房、1998年、153-186頁。
- 7) 立花富から聞き取り（聖和保育史刊行委員会の1979年10月のインタビュー）、1頁。（聖和大学資料室所蔵）
- 8) ランバス女学院幼稚園の「昭和13年度修了記念帖」が北陸学院短期大学の「南文庫」として所蔵されている。ここには「ナースリースクールノトキ」から「黄組ニナツタバカリノ生徒サン」「キイグミノトピック」、そして「ミドリグミニツキ(一)」「ミドリグムニツキ(二)」へと成長する子どもたちの姿が写真とともに続く。この「ミドリグムニツキ(二)」には、「トモチヤンノツクツタ六角時計デミンナガヨロコンデ針ヲウゴカシナガライツタコト」が綴られている。また、最後

- に子どもたちの将来の夢が「僕が大キクナツタラ」「私が大キクナツタラ」に語られている。ちなみに、立花はこの時緑組の担任であった。当時学生であった南信子が数年後聖和幼稚園でともに働いた関係で入手したものと推察できる。
- 9) 松平信久「保育者は何を期待されてきたか」『発達』83号、ミネルヴァ書房、2000年、4頁。A・L・ハウについては、拙稿「A・L・ハウの幼児教育思想とキリスト教主義」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第20巻、2005年、81-90頁を参照。
- 10) フランセス・リトル著、佐々木 翠訳『勲章の貴婦人』広島女学校、1996年、22-23頁。フランセス・リトルはマコーレーのペンネームである。滞日5年間の見聞をまとめた本書の出版は1906年2月であったが、1911年まで毎年版を重ね、世界各地で愛読された。
- 11) Bryan, A. E., "The Letter Killeth," National Education Association, *Addresses and Proceedings*, 1890, p.576.
- 12) 聖和保育史刊行委員会、前掲書、56-58頁。
- 13) Shapiro, M. S., *Child's Garden-The Kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, The Pennsylvania State University, 1983. pp.171-191. 藤武『アメリカ幼児教育思想の研究－デュイ理論を基軸にして－』第一法規 1985年。
- 14) Blow, S., *Educational Issues in the Kindergarten*, D. Applen and Co., 1908, pp.2-4. ブローは中心統合主義、自由遊戯主義に加え、産業主義プログラムを新しい潮流として挙げ、批判している。
- 15) *ibid.*, pp.6-7.
- 16) Burk, F. and Burk, C. F., *A Study of the Kindergarten Problem, The Kindergarten and First Grade*, 2, 1917. これは、Burk, F. (et. al.), *A Study of the Kindergarten Problem in the Public Kindergarten of Santa Barbara, for the year 1898-9*, Whitaker and Ray Co., 1899. をヒルが編集し直したものである。
- 17) Blow, *op.cit.*, p.156.
- 18) *ibid.*, p.154.
- 19) *ibid.*, p.179.
- 20) 金子嘉秀「明治後期の幼稚園におけるフレーベル主義をめぐる保育実践の変容に関する研究－京阪地域および広島女学校附属幼稚園を中心として－」広島女学院大学院教育学研究科、2013年、103-144頁。広島女学院歴史資料館所蔵の松下トクの『保育案ノート』全3冊は、松下が師範科に入学した1906年4月から卒業を迎えた1908年3月までのものである。ここではデジタル化された井上とく氏（旧姓松下）「保育日誌」（英文）（1906～1908. 19011）『小さき者への大きな愛』広島女学院2006年10月1日発行を用いた。
- 21) The Kindergarten Union of Japan, *Second Annual Report of the Kindergarten of Japan, 1907-1908*, pp.25-26. 師範科の生徒らは毎日幼稚園で、前週末に主任保母から検閲を受けた保育案通りに実習を終えると即座に学校に戻り、学課授業を受ける生活であった。
- 22) 聖和八十年史編集委員会『聖和八十年史』聖和女子短期大学、1961年、211-215頁。
- 23) 同上書、214頁。
- 24) The Kindergarten Union of Japan, *Eighth Annual Report of the Kindergarten of Japan*, 1914, pp.34-37.
- 25) The Kindergarten Union of Japan, *Tenth Annual Report of the Kindergarten of Japan*, 1916, pp.34-37.
- 26) ピービー「幼稚園の見学」ランバス女学院『ランバス女学院報』第1号、1932年、1頁。（聖和大学資料室所蔵）
- 27) 広島女学院附属幼稚園『幼児曲集』（1915年）は、『小さき者への大きな愛』広島女学院に収められている。この書は聖和幼稚園100年史委員会『聖和幼稚園100年史』聖和大学、1991年、16頁において、「リズムと歌の遊戯」として紹介されている。
- 28) 広島女学院附属幼稚園「保育綱目」1914年（聖和大学資料室所蔵）
- 29) 「全国保育代表者協議会概況」『帝国教育』第516号、1925年、107-108頁。
- 30) 同上、100頁。幼稚園令制定をめぐる「全国保育代表者協議会」の動向については、湯川嘉津美「大正期における幼稚園発達構想－幼稚園令制定をめぐる保育界の動向を中心に－」『上智教育学論集』31号、1997年、1-20頁が詳しい。
- 31) 同上、103頁。

謝辞

本論文執筆の資料閲覧にあたり、広島女学院図書館長の佐藤茂樹先生ならびに広島女学院歴史資料館の西原真理子館員には格別のご高配を賜りました。この場をお借りして、お礼申し上げます。